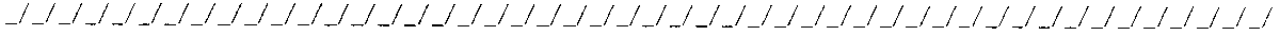




「秋が終われば冬がくーるほんとうに早いわ」っと。いやー、前回のニューズレターはいつでしたっけねえ、はっ、はっ、は……。今は昔、9月19日・20日に「KKR片瀬・ニュー向洋」にて今年度の合宿が行われました。その報告を取出理事に、初参加の感想を徳田昌子さんに寄稿していただきました。行った人はそこで学んだことを思い出して、行けなかった人は以下のレポートを今後のディベートの糧にして下さい。



98年JBDF合宿報告

取出恭彦

今年のJBDF合宿（今回の合宿の際配られた10年誌によれば今年の合宿が第14回になる様である。）も無事終了した。

こういう勉強会としての合宿を毎年欠かさず続けて14回目を数える、というのもたいしたものだ、と思う。

さて、今年の合宿は合計17名参加と盛況であった。初参加の方も何人もいて、大変意欲的に取り組んでいただけたのはうれしい限りである。

1日めは英語でのパラメンタリーディベート。

まず、山口さんの講義から始まった。

パラでは相手の立論の最中に質疑が許されているが、その際、質問者は片手を頭にのせて、Point of Information といって立ち上がる事になっている。なぜ頭に片手をのせるかという、どうやらイギリスでの国会質疑の際、かつらが落ちないようにおさえた習慣が由来らしい、という話があり、ひとつ利口になった。このPoint of Informationは宴会の際の自己紹介の場でも大いに活用された。

パラは2人あるいは3人のチームを合計9チーム作り、1チームが肯定側、否定側、ジャッジをそれぞれ1回ずつおこなった。論題は、1. スポーツでの薬物の使用を認めるべき、2. 住むのには都会より、田舎の方がよい。3. 日本は首相公選制を採用すべし、という3つをおこなった。論題が与えられてからの準備時間は15分程度でその間に、主張をまとめるのは大変だったが、特に1や3の様な政策論題では肯定側がしっかりと論題の定義やプランの提示をしないと、そのあとのお互いの議論がうまくかみあわなかったり、論点があいまいなままになってしまう危険性があると感じた。2の様な価値に関する論題は、我々の通常の例会ではやっていないので、どんなふうにも話を展開するとおもしろいディベートになるのか、私自身今一つ分かっていないので、今後もう少し研究してみたいと思った。個人的にはリサーチによるエビデンスのないディベートというのはちょっと物足りない気はするが、与えられた短い時間の内に、主張をまとめて、スピーチをする、というのは社会人に求められる重要な能力の一つであると思われ、そういう意味ではパラをやることは我々にとって非常によい訓練だと思う。今後、JBDFでもワークショップと組み合わせ、定期的に行っていくのもよいと思う。

2日めは日本語でのディベート。論題は「日本は首相公選制を採用すべし。」で、幹事の里村さんに用意していただいた資料を参考にしてディベートをおこなった。チーム分けは前日に発表になり、2日めの朝は多くの人が2日酔いでばーっとしているなか、渡辺起里さん、塩島さん、加藤宏さんチームは早朝から準備にとりかかっており、気合がはいつていた。ディベートは1日めと同様、各チーム肯定側、否定側、ジャッジを1回ずつおこなった。会議室を真ん中で仕切り、3チームずつに分かれておこなったが、となりのグループの熱弁が聞こえてきて思わず苦笑する場面もあった。（特に渡辺さん（夫）のスピーチはすごい迫力！！）

さて、どの試合も白熱し議論が展開される良い試合ばかりだったが、一つの例として我々チーム（取出、尾崎、高尾）がジャッジをした試合を簡単に報告したい。

肯定側：瀬能、佐藤、川俣

否定側：加藤亨、花井、里村

（チームのメンバーにももしかしたら記憶違いがあるかもしれません。）

肯定側、否定側の立論は以下の通り

肯定側立論（瀬能さん）

プラン：首相を公選で選出する。首相候補は国会議員である事。過半数の信任で選出（過半数に満たない場合は決戦投票）。任期は4年。国会の3分の2の賛成で弾劾できる。

メリット1 民主主義の達成

（国民の意見をよりよく反映させる事ができる）

メリット2 国民の政治意識の向上。

メリット3 適切な政策を断行できる。

（国民の過半数の支持を背景）

否定側立論（加藤さん）

不利益1 政治が混迷する。（首相と議会が対立するようなケースが起きがちでその為に、政治が混乱する。）

不利益2 首相選びが人気投票的になってしまい口先だけの人や独裁的な人が選ばれてしまう危険性がある。

カウンタープラン 衆議院のみの1院制を採用する。

これにより肯定側が主張する3つのメリットはよりよく達成される。

